
ブルーダイヤモンド～青いよどみにひかれて～

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルーダイヤモンド～青いよどみにひかれて～

【NNコード】

N8418D

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

「それは哀しみを湛える青でした」突如、目の前で訪れた友人の死。その首元で光るのは 青いよどみ という名のダイアモンド。人を酷く魅了し、悪夢へといざなうその青は、ある少女の哀しみと絶望の結晶だった。

(前書き)

この作品はフィクションです。
実在の人物・団体等いっさい関係ありません。

梅雨も明け、ようやく夏到来を思わせるよく晴れた七月のある日曜日。

「チヨ～久しぶり」

「元気してたあ」

繁華街で待ち合わせをしていたさやかとかおりは、三ヵ月ぶりの再会を手放しで喜びあつた。

小学生以来の親友である二人であつたが、中学を卒業し、別々の高校へ通っているため今日まで中々会う機会が作れなかつた。

「どう、聖歌は？」

二人は互いの近況報告がてらその辺を歩くことにした。

かおりが高校の印象を訊ねると、さやかは次のようにおどけてい るような体で答える。

「う～ん。ぼちぼち？」

「そつかあ。聖歌はお嬢様学校だもんねえ」

さやかの通う聖歌女子大学付属高校はミッショニン系の私立高校で、特に校則が厳しくて有名な学校であった。
かおりの方は近所にある都立高校に通っている。

彼女の家は母子家庭であり、私立に行けるほどの経済力はなかつた。

「かおりの方はどうなの？」

「うち？うちはちょっと期待外れかな。部活にでも入る？と思つたんだけど、どこの部もなんか決定力に欠けてさあ、結局帰宅部ううみたいなあ」

「ふうん。カツコイイ先輩とかいなかつたの？」「さやかがニヤニヤして訊いた。

「いないいない。芋、茄子、南瓜ばつか。てか、それが一番決定打？」

「ええ？でも、男子いるだけましょ。女子校なんてさあ、女ばつかで厳しいじゃん？ほんとやんなつちやうつて感じよ、もひ？」

「先生とかは？男の先生はいるんでしょ？」

「はつ足くさそつなのばつかし」

「アハハハア、マジでえ」

互いに通う高校の不満を口にし、さやかとかおりは一人して大笑する。

この時期は高校でも友達はできいてても、まだまだ気が置けないとまでなるには時間が足りない感も否めない。

その点、昔からの気が合つた友達との会話はなによりもストレス発散になる。

違う高校に通うという別々の道を歩むことになつても、一人の友情は変わらずそこにあつた。

「あつ」

道端にアクセサリを扱つている露店があつた。

「ねえ、これみてえ！めちゃ可愛くない？」

「ほんとだあ」

そこで見つけたアクセサリにかおりは目を輝かせてしゃがみこむ。

さやかも一緒に覗き込んで同意した。

それは羽の形をした銀細工の先に宝石があしらわれたペンダント。その宝石は太陽の光を反射して、青く青く輝いている。

それは、天上の頂で青い光を灯す月のようで、酷く一人を魅了

した。

「おじさん、コレ本物の宝石?」

かおりが訊ねると露店主の男が頷く。

「ああ。でもまあ、価値のないクズダイヤだけだね」

「へえこれがクズねえ」

かおりには信じられなかつた。

彼女は今まで本物の宝石など見たことはなかつたが、これがクズだとはどうてい信じられなかつた。このダイアがクズというなら、この青はなぜこんなにも自分を魅了しているのか?

かおりは露店主に値段を訊く。

「五千円」

「五千円かあ」

バイトなどしていかおりには少し厳しい金額であった。

「かおりが買わないんだつたら、私買ってもいい?」

大枚はたくか自制するかジレンマに陥つてゐるかおりにさやかが訊ねた。

かおりは心の中で一瞬戸惑つも、

「うん。さやか、買いなよ」

と笑顔でさやかに譲つた。

「ほんとお。じゃあこれ」

さやかは嬉々として財布を取りだし露店主に五千円を支払う。

「まごどあり」

露店主からペンドントを受け取ると、さやかはすぐにそれを前にした。

「へへ、どう?」

「うん、可愛い。めちゃ似合つよ」

かおりはそつそつとさやかを讃めつつも、内心複雑だった。

自分も欲しかつたな。

さやかの胸元で輝く青いダイヤモンドを見て、どうしてもそつ思つてしまふのだ。

「いい買い物しちゃった

「そだね」

かおりはさやかの首にかかつたペンドントを、引き千切つて奪い取つてしまいたくなる衝動を必死で押さえていた。

2

次の日。

「今日もお勤めご苦労さん」

放課後、授業から解放されかおりは「さやか親父くわい」とを言つながら伸びをする。

「かおり、マックよつてこいつよ」

「うん?」

同級生の誘いに応じようとしたとき、かおりの携帯電話が鳴り始めた。

さやかからだった。

さやかとは特に頻繁に電話のやりとりをしてゐるわけではない。昨日の今日で珍しいなと思つつかおりは電話に出た。

「もしもし。さやかあ?」

『かおり……』

受話器から蚊の鳴くよつなさやかの声が聞こえてきた。

「どうしたの、さやか?」

不審に思ひ訊ねるかおり。

何かいやな予感がある。

『…………』

一時の沈黙のち、

『かおり、助けて』

泣いてるのか、怯えてるのか、さやかの声が震えてる。

「どうしたのよー。さやかっ！」

『私、どうかしてる……恐い』

ただならぬさやかの言葉。彼女がパニックを陥ってるのが電話越しに
しからありありと伝わってきた。

「さやか、落ちついて！」

『いやっ 恐い……助けて』

「何があったの？今、どこにいるの？」

『駅前……かおり、助け』

そこで電話が切れた。

「もしもし、さやか」

「どうかしたの？」

「うん。中学の友達の様子が変なの。ちょっと行つてくるから、マ
ックはバスね」

そう同級生に告げ、かおりは駅前へと走った。

かおりはさやかがあんな風に怯えている声を始めて聞いた。
どちらかといふと氣丈で明るいさやかがあんなになるなんて……。
胸の内に落とされた不安がじわじわと、だが確実に広がっていく。
それを振り払つようにかおりは駅前へと走った。

駅前は古賀店などと繋がった、公園のような歩道橋が広がっている。

かおりは歩道橋の端っこのベンチに俯いて座つてさやかを発見する。

『さやか！』

かおりが呼び掛けるとさやかがゆっくりと顔を上げた。

『つー？』

そのさやかの顔を見てかおりはぎょっとする。

責めているなんでものではない。

白田は血走り、その田の周りには窪んで見えるような隈ができる、
ドランでも塗りたくなっているように顔面蒼白になっている。

かおりは一瞬、死人の首が動いたような錯覚に陥った。

「どうしたの、さやかっ！」

心なしか髪の艶さえ消え失せている。

かおりはたつた一日で変わり果ててしまつた友人の肩を掴み詰問
した。

「たつ助けて、かおり……」

さやかは縋るよつにかおりの顔に震える手を伸ばす。

かおりはそんなさやかの手を握り隣に腰掛けた。

「さやか、落ちついて。何があつたの？」

「あつ アイツが アイツが来る」

さやかは兢兢と黒田をギョロギョロと忙しく四方に動かしながら
言った。

「アイツって誰？」

「アイツ……夢に出てきた

「夢？」

「アイツがつ！アイツが来るのつ……」

「…………！」

かおりの全身の鳥肌が逆立つた。

さやかの言つていることはちつとも分からないが、

その迫力に、そして底冷えするような何かが自分を巻き込んでいる
気がした。

「おつ

落ちついて……さやか、ゆっくり話して。昨日の夜、
恐い夢を見たの？」

かおりの問いにさやかは激しく首を縦に振る。

「どんな夢？」

「なんか……なんか、殴られたり蹴られたりして……それが妙に

リアルで ぐぬつ苦しきつて……変な映像が よつよく思
い出せないつ

「それで？」

「そしたらアイツがあつ……」

さやかは悲鳴を上げるよう言つた。

「アイツって誰なの？」

「全身に刺青 じゅつ呪文のような刺青のかつ髪の長い女

裸の

「全身刺青……」

かおりはぞつとする。

真つ白い肌の全身に梵字が所狭しと彫られた女が鮮明に脳裏に過
つた。

「目が覚めたらアイツがつアイツがつ付きまといへる……ちよつ
とした暗がりとか、窓の向こうとか ずっとずっと私を見て
！」

「今も？」

訊ねるのも恐ろしかった。

普通なら戯言と思うかもしない。

でも、かおりは完全にさやかの言葉を信じ切つていた。

それは親友の言つことだから、などというチ プなことではなく、
全身から引きりなしに汗をかいている自分、そう自分を支配する
自分の意志を憚らない自分が何かを感じ取つてゐるのだ。

さやかは恐る恐るかおりから視線を外し、

「今は見てな ひつ……」

さやかの顔が激しく歪む。

かおりは振り返りさやかの視線の先を見るが、そこには歩道橋用
の狭いエレベ タ があるだけだった。

「さやか？」

「いや」

さやかは立ち上がり、かおりには見えぬ何かに怯え後退りする。

チン

「えつ？」

エレベ タ の中にも前にも誰もいなかつた。なのにエレベ タ の扉が勝手に開かれる。

「きやつ」

「さやかつ！」

さやかの体がぴくつぴくつと痙攣でも起こしたよつに跳ね上がる。そして、

「きやあああああ

さやかの体が宙に舞い上がり歩道橋の柵を越えた。

その一瞬、かおりの田に写る。

太陽を反射し輝く青い光が。

3

佐渡は夕日が眩しいといわんばかりに顔を顰めて車から降りた。不精髭に悪人面の佐渡は警視庁の警部である。

四十後半、独身の彼の背広はどことなくよれつていた。

「お疲れ様です、警部」

所轄の丸川刑事が敬礼で佐渡を出迎える。

「ん。情況は？」

そう訊ねながら佐渡は現場に目を向いた。

そこには遺体を象つた白いチョ クの線、

そしてその頭部辺りにまだ乾き切つていらない鮮血が広がっている。

「はい。被害者は田中さやか、十五歳。市内の私立高校に通う高校生。あそこの歩道橋から転落し、頭から落ちて死亡したもよつ。一

応、病院に運ばれましたが蘇生できなかつたようです。転落する直前、被害者が一人でよろめいているところを多数の人間が目撃しているところから、事故の可能性が高いと思われます」

それを聞き佐渡が悪態を吐く。

「なんだ、事故かよ わざわざ、俺が出張つてこなくともよかつたじゃねえかあ」

「いえ、それが被害者の転落を田の前で見た連れの女子高生が妙なことを言つてしまして」

「妙なこと?」

丸川の言葉に佐渡は眉を顰めた。とかく佐渡の顔は常に不機嫌そくに見える。

「ええ、こっちです」「ええ、こっちです」

佐渡は丸川に連れられ歩道橋を上がる。

被害者が転落した場所より離れたベンチに一人の女子高生が打ち拉がれて腰掛けっていた。

「警部、こちらが被害者の友人の佐藤かおりさんです」

「…………」

かおりはゆつくりと顔を上げ、虚ろな目で佐渡を見る。

「どうも」

佐渡は小さく会釈した。

「佐藤さん、もう一度田中さんの転落前の様子を話していただけませんか」

丸川に言われ、かおりは俯いてボソリボソリと口を開く。

「さやか……なにかに酷く怯えてたんです。アイツがくるとか……夢がどうとか……落ちる直前も……幻覚でも見ているみたいに、見えないなにかに怯えてる様子で」

「幻覚か……薬中の可能性もあるか」

佐渡の言葉を聞きかおりが熱り立つ。

「さやかは薬なんかやるような子じゃありませんっ……」「ふむ

佐渡は唸る。かおりの言い分などあてにならないといった風である。

「かおりっ！」

人集りの中から一人の男子学生がかおりに駆け寄つてくる。

「圭ちゃんっ！」

田中圭介、さおりの年子の弟である。

「かおり……姉ちゃんは？」

「…………」

かおりは無言で首を横に振る。それを見て圭介はその場にへたり込んだ。

「そんな……嘘だ　姉ちゃんが……」

「圭ちゃん」

驚きと哀しみで泣き崩れる圭介にかおり自身も泣きながら寄り添つた。

「ちつ」

佐渡は誰にも聞こえないよう小さく舌打ちをし、一人に背を向け歩きだす。

「警部、どうらへ？」

「車ん中で煙草吸つてくるだけだ」

丸川の問いに、佐渡はぶつきらぼうに答えて車へ戻り立つとする。この一帯は屋外全面禁煙区域なのだ。

「けえ～じさん」

車に乗り込もうとした佐渡に一人の男が声を欠けてくる。

首に一眼レフのデジタルカメラを引っ提げた、軽薄な笑みを浮かべた男。

「牧村っ！」

佐渡は男のことを知っていた。

だからといって親しい間柄ではない。

寧ろ吐き氣がするほど忌み嫌っている。

男の名は牧村宗也、大手・毎朝新聞の記者だ。

「どうして、てめえがここに」

「やだなあ刑事さん。僕は新聞記者ですよ？事故があれば出向ぐに決まってるじゃないですか？」

牧村は二タニタ人をおちよぐるような笑みで言つ。

「てめえ、また俺の周りうろちょろしてんじゃねえだらうな」

佐渡は牧村のシャツの襟を掴んで凄んだ。

「ふふ、それは自意識過剰じゃないですか？」

まあもつとも、刑事さんの周りにいればなにかと退屈せざるにすみそなのは事実ですけどねえ」

「…………」

「しかし、若い子の死亡者ってのは痛ましくて辛いですねえ」

牧村は愁傷とはかけ離れた、寧ろ楽しんでいるような表情で言つ。

「特に刑事さんはとつてもナイ ブ見たいですし」

「失せろつ！」

佐渡は牧村を突き放し、車に乗り込んだ。

そしてシガ ライタ で煙草に火を点け脂を吐き出す。

「ちつ」

いつも思つてしまふ。

刑事なんかになるんじやなかつたと。

損傷の激しい遺体や死臭には慣れても、

被害者が遺していくものの嘆きには一向に慣れることはない。

バツクミラ に[与]る自分の顔を見て佐渡は苦笑する。

「ふつ

そんな面かよ」

佐渡惣一朗、四十七歳。

牧村の指摘どおり、凶悪面に似合わずナイ ブな男であった。

夕方の帰宅ラッシュの駅前で起つた、突然の事故。

現場には黄色い規制線テープが張られ、それを囲むよつて野次馬ができていた。

「事故か？」

「女子高生が転落したんだってよ」

「あれ、血だろ？」

現場を取り巻く囁き声。

そんな人集りの中に一組みの母娘がいた。

「ねえ、ママあ～！もう帰らうよお」

「…………」

五歳くらいの娘が母親に訴えるが、
その母親は事故現場を見物するのに夢中になつて聞く耳をもつて
いない。

「ぶう」

娘は不貞腐れてしまがみこむ。

すると昼間の熱をまだ残した石畳の上に、なにかキラキラ光つて
いるものがあることに気が付いた。

「わあ～！」

それを拾つと娘は感嘆の声を上げた。

それはキラキラと青く輝く世にも美しい代物。

「きれい」

娘はそれを指で摘んで夕口に翳すように掲げる。

それは夕日の赤に負けじと青く青く輝いている。

まるで自身が発光しているかのような、纖細で人を魅了する青。

「えへへ」

娘はニンマリと笑つて、大事そうにそれをポケットにしまいこん
だ。

「ほう、ホ プダイヤか」

その様子を牧村が歩道橋の上から覗き見ていた。

「やっぱ、刑事さん。あんたはスト キングに値する男だよ」

牧村はほくそ笑む。

「いや面白くなりそうだ。

4

『ずっとほつたらかしだったのに、今更父親ぶつて説教しないでよ
つ……』

「はつ！？」

佐渡は飛び起きるように田原を見めた。

「はあはあはあ」

全身汗だくなっている。

今日も朝からとても蒸し暑かった。

佐渡は立ち上がり、台所の蛇口をひねって水をがぶ飲みする。
「ぐえ」

小ちくげつぶしながら、筆筒の上に立てておいていた写真を見た。
写真には一人の女子高生が写っている。

「…………」

写真の少女はどことなくかおりと面影がダブった。

「へつ……美保、地獄で達者にやつてんのかね」

苦笑混じりの佐渡の田尻に光るもののが溜まった。

「…………」

昨日の事故の捜査で所轄署を訪れた佐渡はテーブルの上に並べられた、田中さおりの遺留品の数々と睨めっこをしていた。その中の一つ、ビニール袋に入ったペンダントを手に取る。羽を象ったペンダントだ。

「警部、田中さやかの検死結果がでした」

丸川がやってきて佐渡に告げる。

「それで？」

「はい。死因は脳挫傷、あるいは出血多量によるショック死。薬物各種の結果も陰性だつたようです。やはり、事故死が有力ですね」

「そうか」

丸川の報告に頷く佐渡。その様子は聊か不満げに見える。

「なにか問題でも？」

「いや、なんでもない」

丸川の問いに佐渡はぶっきら棒に答えた。

ただ、昨日の女子高生 田中さやかの友人・かおりの言葉、

『さやか……なにかに酷く怯えてたんです。
アイツがくるとか……夢がどうとか 落ちる直前も……何か
幻覚でも見ているよ』
見えないなにかに怯えてる様子で』

これがどうも引っ掛かる。

ただの思い過しかもしれない。

牧村の出現、そしてかおりの姿に過去の懺悔が突出して、彼女に肩入れしているのかもしれない。

「それよりこれ見る」

「はい？」

佐渡にペンダントを手渡され丸川は首を傾げた。

「その羽の先のところ、なにかくぼみがあるだろ？」

「ええ。石かなにかが付いてた跡ですか。転落時の衝撃で取れたんですね。これがなにか？」

「いや、べつに」

そもそもなんとなく気になつただけ。ただ、なんとなく。

佐渡は立ち上がり、喫煙スペースで煙草に火を点ける。

「…………」

最近はどこもかしこも禁煙でやりにくいつらありやしねえ。
かつては煙たいメジが強い刑事の職場にも禁煙の波は押し寄せ、
愛煙家の佐渡は肩身の狭い思いをしている。

ツルルルル

しばらくして刑事課の電話が鳴り始めた。

丸川が受話器を取つて応対する。

「警部！付近のアパートの風呂場で住民母娘の遺体を大家が発見したとの通報です」

「ちつ」

丸川の言葉に佐渡は舌打ちして、まだ半分近く残っていた煙草を灰皿に押しつけた。

「ゆつくり一服もできやしねえ」

ソファに放っていた背広を掴み、佐渡は現場に向かった。

現場は六畳一間ほどの木造アパートの205号室。

若い母親と幼い娘が湯槽に張った水に顔を埋めて絶命している。

「暗れえなあ。電気点けろつ！！」

「すいません。どの部屋の電気も切れてるみたいで点かないですよ
部下の応答に佐渡は舌打ちした。

現場のアパート、まだ昼間だというのにかなり薄暗い。

向かいに立っているマンションが日光を遮っているのだ。

人が死んでいる現場はどこも居心地のいいものではないが、ここ
は特に湿気とカビの臭いが酷く陰鬱に感じる。

「で、仮の身元は？」

「あつはい。被害者はこのアパートの住人、高山まゆみ・二十五歳とその娘、晶子五歳です」

「旦那は？」

監察医が遺体検分を行なつてゐる様子を睨むように見ながら、佐渡は丸川に訊ねる。

「奥の部屋に遺影がありました。どうやら先立たれて、女手一つで娘を育てていたようです」

「そうか で、発見した大家は？」

「あつ下で待つてもらつています」

佐渡は丸川に連れられ、外付けの階段を降り大家の話を聞きにいく。

「大家の藤谷さんですね。あの、発見時の詳しい情況を話していただけですか？」

丸川が訊ねると大家は待つてましたと言わんばかりにの勢いで口を開く。

「そりや、びつくりしたのつてなんのつて。

いえね、高山さんの勤め先、そのスパなんだけどね、そこ

の店長と私知り合いで、

その人から高山さんが勤務時間になつても来なくつて電話にもでないつて連絡があつて、

「高山さん若いけどああ見えてすぐ真面目でしう？」

ほら、こないだも私が夕飯のお裾分けしたら、丁寧なお礼状と押し花のしおりを器と一緒に

「…………」

大家はいかにも世話を焼きで、喋りだしたらとまらないといつたタ

イプのお婆ちゃんである。

「高山さんは無断欠勤するような人じゃないから、私部屋を訪ねて行つたのよ。

でも、いくら呼び鈴鳴らしてもでないじゃない？

もうそこで、私、ピンといやな予感がして、ほら、私昔から勘

がいいでしょ？

だから、悪いと思つたけどアノブ回してみたら、案の定鍵がかかつてなくて、

恐る恐る入つたら、あんなことになつてて。私、ぞつとしたわよ。あんなにぞつとしたのは、私が女学生だった頃、隣の山田くんが私のパ

「.....」

そこからは永遠とお婆ちゃんの思いで話が続く、そう判断した佐渡はその場に丸川を残し現場へ戻つた。

一体の遺体はすでに湯槽から引き上げられ床に寝かせている。その形相は凄まじいものがあった。

特に母親の方は目をひん剥き、口を激しく歪めており、死ぬ直前の恐怖をありありと物語ついていた。

「どうですか、先生？」

佐渡は監察医に訊ねる。

「今日は暑いからな、死後一・二時間つてところか。溢血点が認められるから窒息死なのは間違いないだろ。現場の情況から自殺や事故は考えにくいが、詳しいことは死亡解剖してからだ」

「そうですか。おい、仏さん運びだせ」

佐渡の指示で遺体は白いシートを被せられ担架で運びだされる。

「ん？」

特に担架が揺れたわけでもない。なのに娘の右腕が担架からこむつとはみ出し垂れた。

それを見て佐渡は、

「おい、ちょっとまで」

担架を運んでいた人間を制する。

娘の拳はぎゅっと握られていた。

まだ死後硬直は始まつていないので堅く、なにかを手放さないと意志が込められているようだ。

「.....」

佐渡はゆっくりと慎重に娘の拳をこじ開ける。すると手の中からなにかが零れ落ちてきた。

「これは」

それは青色の宝石。

佐渡は床に落ちたそれを広い上げた。
日当たりが良くなない薄暗い部屋の中、だがその宝石は青く青く光を灯している。

「…………」

胸がざわざわしてきた。

深夜、人気のないトンネルでも歩いてくるような緊張感が佐渡を包む。

『なにかに酷く怯えてたんです。アイツがくるとか……夢がひとつか

青……。

なにかが起っている。

とても憚ましいなにかが。

。

さやか……。

5

あの明るかつたさやかがあんな風に怯えて死ぬなんて。
さやかは優しかった。その優しさに強さが見えた。
目を瞑つて彼女を思えば笑っている顔が一番に思い浮かぶ。

ときたま喧嘩しても、たとえどんなに私の我慢でも、さやかの方から謝つてくれる方が多かった。

さやかの『「」めん』聞くと、自然と私も『「」めん』を言えた。

違う高校に通うことになつても、さやかと私は強い絆で結ばれていて、たとえ毎日会えなくとも、頻繁に連絡取り合わなくていいつもさやかとは繋がつていた気がした。

でも、もうさやかはない。

もう、あの笑顔を会うことはできない。

喧嘩して、さやかの『「」めん』を聞くことも、私があんな風に素直に『「」めん』を言えることも、たぶんもうない。

なぜさやかはあんなに怯えて死んだのか？

事故なんかじゃ絶対にない。

なにかが……なにかがさやかを

。

その夜、警察からさやかの遺体が返つてくれるといつて通夜が行なわれる。

かおりは制服を着てかなり早めに葬儀場へ向かつた。

「かおりちゃん」

会場へ付くと喪服のさやかの母親がかおりを出迎える。

「おばさん……」

「かおりちゃん。ありがとうね来てくれて」

さやかの母親は涙を堪えながらかおりに頭を下げた。

かおりは堪らない気持ちになつて床に目を落とす。

「かおりちゃん、まださやか警察から返つてきてないのよ。

その代わりと黙つては悪いんだけど、圭介のところに行つてしまつてくれないかしら？」

「圭介さんの？」

「あの子、お姉ちゃんっ子だったから 私たち以上に落ち込んで
じやつて……」

亡くなつた娘、そして遺された息子の憔悴に心を痛め、母親はハンカチを濡らす。

「圭ちゃんはどこに?」

「親族控え室に一人でいると思つわ」

「分かりました、行つてみます」

そう言つて頭を下げ、かおりは圭介のところへ向かつた。畠の親族控え室、圭介はすみつこの壁に凭れ掛かりテレビを見ていた。

いや、見ているというより、付け放しになつたテレビを眺めていると言つたほうが正しいかもしねり。

「圭ちゃん……」

「…………」

かおりの呼び掛けに、圭介は一瞬だけ顔を上げ、かおりを一瞥してすぐに目を伏せた。

圭介の目の周りには薄ら隈ができる。

たぶん、昨日からあまり眠れていないのである。

それはかおりも同じである。きっと自分も酷い顔をしているだろう。

う。

「…………」

かおりは無言で圭介の横に腰を下ろした。

沈黙。かおりは少し緊張した。

圭介になんと言葉をかければいいのかと。

自分も悲しくて苦しい。

でも、家族であり姉を心から慕つていた圭介の痛みはきっと自分よりも重い。

暫らく、テレビの音だけが雑踏のように流れていると、圭介が首を傾けかおりの肩に自身の頭を預けた。かおりは少しじだけほつとする。

自分の存在が圭介にとって、少なくとも重荷にはなっていないのだと感じて。

「禿げ山覚えてる?」

圭介がぼそりとかおりに訊ねる。

禿げ山とは近所にあるコンクリートで舗装された崖のよくなっているところである。

「小学校の頃も、いつも二人で登りつこしたよな」「うん」

圭介は思い出に触発され少しだけ微笑んでいる。

「姉ちゃんがよくビリになつてたけど、

今思つと、俺の方が運動神経鈍いから、勝ちを譲つてくれてたつていうか、

落ちないか心配で下から見守つてくれてたんだよな、アレ

「そうだね」

「姉ちゃん笑つてること多かつたけど、あれだけつこつ心配性だつたんだよな。それにあ、我儘なトコもあつたんだぜ。夜に突然プリン食べたいとか言い出してさ、コンビニに買いにいかされたりとかよくあつたし」

「そうなんだ

かおりの知らない、家族だけが知つていた友人の姿に少しだけこそばゆい感じがする。

「うつうう

圭介が泣き始める。

心という器に色々な感情が一斉に注がれ溢れ出てしまつたかのようだ。

かおりはそつと圭介の手を握つた。

圭介の手の平にはくつきりと置の跡が付いていた。

「ありがとう、かおり

「えつ?」

「かおりがいるから……来てくれたから、俺まだ凌げてるんだと思

「

圭介はかおりの手を握り返した。

かおりはそんなことを泣きながら圭介の中のさやかを見る。圭介の中にさやかが確かに息衝いている気がした。

「ありがとう」

かおりは素直にそう囁く。

やがて圭介は座布団を枕にして寝つた。本当に一睡もできていなかつたようだ。

かおりは立ち上がり圭介のお腹にもう一枚座布団を被せる。部屋を後にしようとテレビを消そうとしたとき、

『 市の母子殺人事件で、娘の晶子ちゃんが青いダイアモンドらしき宝石を握り締めていたことが明らかになり、警視庁では事件となんらかの関係があるのか調査を 』

それまで雑音でしかなかったテレビの音がかおりの耳に飛び込んできた。

青い ダイヤモンド……。

かおりの脳裏に転落直前のさやかの姿が浮かんだ。夕日に照らされた町に舞い上がったさやかの体。そしてその首元で確かに輝いていた青い光。

一昨日さやかが買ったペンダント 自分が欲しくて買い逃したペンダント その先端に灯っていた、人を酷く魅了する青。

かおりは無意識のうちに駆け出していた。

高山母子殺人事件の捜査本部が所轄署に設置された。

「死亡推定時刻である、午前十一時から午後一時の間、付近で不審人物を見なかつたか隣住民に聞き込みをしましたが、今のところ有力な手がかりはありません」

「うむ」

部下の報告を耳に佐渡は唸る。

「他は？」

「はい」

丸川が立ち上がり、ビニール袋に入ったブルーダイアモンドを掲げる。

「鑑識の結果、これは本物のダイアモンドだそうです。ただ、レザード肉眼では確認できないほどのシリアルナンバーが彫られていますので、これは遺灰から合成ダイアモンドを作る企業のダイアモンドの特徴だそうです」

「遺灰からダイア？」

佐渡は怪訝そうに眉を顰めた。

「はい。遺骨や遺灰から炭素を抽出し、ダイアモンドを合成する技術があるそうです。最近では少子化や核家族化の影響で、墓守がいなくなるかもしないという懸念から、墓を建てずに遺灰を合成ダイアモンドにすることが流行しているんだそうです」

「そうか……」

流行に疎い佐渡は半信半疑といった体で呟いた。

「じゃあ、そのダイアは先立った高山の旦那のものか？」

「いえ。そう思つてその会社に確認したところ、夫が病死してからの一年間の顧客リスト調べてもらつたんですが、高山のものはありませんでした」

「ふむ」

佐渡は丸川の手元の青いダイアモンドを睨むように望む。

それは蛍光灯の白い光を纏つて青く美しく輝いている。

人間の骨があんなになるのか。

確かにそれは魅力的なことかもしれない。

だが、佐渡はどうしても解せないと感じてしまう。

墓を建てずにダイアモンドに。墓守がいなくなるから。

少子化・核家族化 まさに現代この国が抱える問題を結晶化

しているようで、皮肉めいでいる。

「警部？」

「つー！」

つい考え込んでいたところを部下に不審がられ佐渡はハツとなる。

「すまん。あーなんだ？シリアルナンバがあるといつたが、そこから誰のものなのかわからんのか？」

「それがちょうどその上に傷があつて、ナンバを読むのは困難だそうです」

「ふむ」

佐渡は頷きまたも思案に入る。

客観的に見れば、このダイアモンドが事件に関係あるものとする根拠はどこにもなく、まったく無関係の確率の方が圧倒的に高い。なのに佐渡はどうしても気になつて仕方がない。

このダイアモンドの青が……。

まるで深い深い感情が込められているようだ。

「失礼します」

会議室に制服警官が入ってきて佐渡に近付く。

「警部。佐藤かおりと名乗る少女が、青いダイアについて警部に話したいことがあると、面談を求めているのですが」

「つー？」

佐渡はぎょっとなる。そして、驚きついでに一瞬佐藤かおりが誰だったかが頭の中から飛んでいた。

佐渡は思い出さうと呟く。

「佐藤かおり……」

「警部。それって昨日の田中さやかの友人ですよーー。」
と丸川。

『 そうだ、あの娘だ。』

ほんの一瞬だけ、美保と死んだ娘とダブった。

『 なにかに酷く怯えてたんです。アイツがくるとか……夢がひとつ
か 』

『 の言葉を自分に植え付けた。

「他に報告はないな」

佐渡は部下の言葉を待たずに会議室を飛び出した。

警察署を訪れたかおりは応接室のよつなどこに通された。

「お待たせしました」

応接室に佐渡と丸川が入ってくる。

「青いダイアのことで俺に用があると？」

佐渡がかおりに訊ねた。かおりはゆっくりと頷く。

「ニユ スで見たんです。今日、近所で死んだ女の子が青いダイア
を握つてたつて」

「それで？」

「さやかも、さやかも持つてたんですねー！ペンダントの先に付いた
青いダイアをつーー！」

「…………」

佐渡と丸川は押し黙る。

かおりは刑事たちから『それがビッグしたんだ』と思われていると
思い込み、

「関係ないかもしれないけどーー！だけど、私つ

「わかつてます。落ち着いてください」

興奮するかおりに丸川が落ち着くよう制する。

「そのペンドントというのはコレか？」

佐渡はポケットからビニール袋に入れたペンドントを取出しテブルにおいた。

鎖に銀細工の羽がアクセントになつていてペンドント。

「それですっ！」

「そして、これが今日亡くなられた少女が握っていたダイアです」丸川がビニール袋に入ったブルーダイアモンドをペンドントの横におく。

「…………」

佐渡は白い手袋を填め、ペンドントとダイアモンドをビニール袋から取り出した。

そしてダイアモンドを摘み、ペンドントの羽の先にあるくぼみに填め込んだ。

「ぴつたりだっ！」

丸川が驚愕の声を上げる。

佐渡は眉間に皺を寄せ、

「ということは、アレだっ！　びつこつことだ……」

「つまりこういうことですよ、警部つ田中さやかは転落時このペンドントを身につけていた。転落の衝撃かなにかでこのダイアはこのアクセサリから外れ、周囲に転がり、それを高山晶子が拾つたんです」

「わかつてるよ、そんなこつたあ……」

佐渡は熱り立つて、興奮気味に推理を繰り広げる丸川の頭を叩いた。

「だから、そのだな……」

「そのダイアを持っていた人間が立て続けに死んだ」

言いにくそうにしている佐渡の言葉に、かおりが続けた。

誰かの唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえた。

「…………」

その場にいる三人の間に永遠とも思える沈黙が訪れる。

三人はダイアモンドに目を落とす。

すると急激にダイアの輝きと青の深みが増していくような錯覚に陥る。

それはあたかも自分には魔力があるのだと言わんばかりに、青く青く光を灯す。

「いやはや、やっぱり刑事さんは疫病神のようだ」

突然聞こえてきた男の声と、人を小馬鹿にしたような拍手。

固まっていた三人は心臓を跳ね上がらせ、声のした方へ目を向ける。

「牧村つ！？」

声の主は新聞記者の牧村だった。

牧村は一タ一タといやらしい笑みを浮かべて応接室の入り口に立っている。

「てめえ。聞屋がこんなところまできて立ち聞きたあ、ぶちこまれてえのかつ！？」

佐渡は立ち上がり、牧村を怒鳴り付けた。

しかし、牧村は変わらぬ笑みで言う。

「やだなあ、刑事さん。今日の僕はただの一般市民。情報提供者としてここにきたまでですよ」

「なにつ！？」

「ふふ。みなさんはホ プダイアといつものをじ存じですか？」

「？」

牧村は聊か芝居がかつた調子で手を広げ、応接室へ入ってきた。

「とある博物館にある、4・4カラットの地上稀に見る美しい宝石・

ブル ダイアモンド」

「それって確か持ち主が次々に不幸な目にあつたっていう、呪いの

「ダイアですよね」

牧村の説明に丸川が答える。

「その通り、そちらの刑事さんは若いのに博識でいらっしゃる」

「いやあたまたまテレビの特集で見たことあつただけで」

「照れるなつ！」

牧村の賛辞に、頭を搔いて照れ笑いを浮かべる丸川を佐渡がどうぐ。

「そのホ プダイア、今おっしゃられたとおり本当に次々に持ち主を不幸にしたらしいですよ。その中にはかの有名なマリ・アントワネットも含まれてこる。言わざもがな、彼女の数奇な運命が不幸であったのはご承知のこと。近年では、あのマリリン・モンロ も主演映画の中でホ プダイアを身につけている。彼女もまた、謎の変死を遂げた」

「けつそのホ プだか、ホ スだかがどうだつてんだ。それは博物館に保管されんんだろうがつ！？」

佐渡が悪態を吐く。牧村は素直に頷き続ける。

「その通り。ただ、今のは宝石の呪いは実在するといつ前置きですよ」

「前置きだあ？」

「ええ。僕、見たんですよ。昨日の田中さやかが転落死した現場のすぐ傍で、高山晶子がそのダイアを拾つていたところを」

「なつ！？」

驚愕する佐渡たち。これで先の丸川の推理が確信へと変わった。てめえ、それを黙つてみてたのかつ！？」

佐渡が牧村の襟首を掴み上げる。

「呪われていると知つててつ！？」

「はあ？ なに言つてるんですか、刑事さん。その時点で、そんなことを知つてるわけないじゃ ないですか？」

相変わらず牧村は卑しく口角を引き上げている。

「そうですよ、警部。呪いかもしれないってのは、田中さやかと高

山親子が立て続けに死んだから浮上したことであつて、その時点では推測のしようがありませんから。落ち着いてください」「ちつ」

丸川に諭され佐渡は舌打ちをして牧村を放す。

「この男は知つてたとしても見逃してると！ネタのためにには、なんでもするダニみたいな男だつ！？」

「さすがは付き合いの長い刑事さんだ、よくこ存じで。ただ、これだけは忘れてもらつては困ります」

牧村は不敵に言つ。

「たとえ僕が知つていようが知つていまいが呪いは法では裁けない。当然、殺人帮助にはなりませんよ」

「けつ」

佐渡は外方を向く。

牧村の本質は佐渡がよく知つている。

ネタ 　　というより、自分が面白いと思つことを徹底的に追い回し、かき乱し、事件を大きくして、自身の快楽を満たす正真正銘のゲス野郎だ。

「そういえば先のホ プダイアですが、一説には人の心をマイナスに向ける電磁波を発生させるのではないかといふ仮説もあるそうですよ。そのダイアも一応化学分析をやってみてはどうですか？」「けつてめえに言われねえでもやるつもりだつたよ」

牧村の提案に佐渡は強がつたようなことを言つ。

「ところで」

牧村はかおりの方に向き直つた。

「あなたは昨日、田中さやかの転落を間近で目撃した方ですよね」

「そつそうですけど」

かおりは怪訝そうに答える。

彼女も一見して牧村が胡散臭い人間だと感じていた。

「田中さやかはなにかに怯えていたと証言してらつしやつたみたいですけど、その話詳しくお聞かせ願えたら幸いなんですが」

「…………

かおりは戸惑い佐渡の方を見る。佐渡は黙つて頷いた。そのことがなんらかのヒントになる可能性もあると思うからだ。

かおりは意を決してことの次第を話し始める。

「私、さやかに電話で呼び出されたんです。さやかとは別の高校だから。さやか、電話でもすぐ怯えてて、それで私、さやかのもとへ向かつたんです。さやか駅前のベンチに震えて座つていて、一昨日もさやかと会つたんですけど、そのときは別人のように顔面蒼白になつていて、私がなにがあったのか訊ねると、昨日恐い夢を見て、起きたらずっと女の人が付き纏つてくるみたいなことを言つてたんですね。そしたら、誰もいないのに歩道橋のエレベータが開いて、さやかそこから私には見えないなかがやつてきたように怯えだして…………そして…………」

かおりは哀しみを堪えるように口籠まる。

佐渡はかおりの様子に心を痛め顔を顰めるが、牧村は容赦なくかおりに質問を続ける。

「そのペンダントを田中さんがいつ入手したか？」存じで？

「一昨日……会つたとき。銀細工の露店で」

そう、自分が見付けて買おうとして買えなかつた
やかが…………だからさ

かおりはとてもそのことを口にはできなかつた。

「ふむ。では、田中さんが付き纏わっていたという女、特徴かなにか言つてませんでしたか？」

「特徴…………

そうだ。なぜじぶんはそのことを今まで口にしなかつたのか。さやかに聞いたとき、自分の中にはっきりとイメジが浮かんだいや、あれは今思えば植え付けられたと言つた方が正しいかもしれないと、それなのに。

「い…………

とてつもない緊張がかおりを襲つ。

そうか。口にするのも悍ましかつたから、無意識に避けていたに違いない。

「全身に刺青」

「つーー？」

かおりの言葉に、佐渡、そして牧村が目を剥いた。

「全身に呪文のような刺青を入れた髪の長い女だと言つてました」

「つあ」

佐渡は腰碎けになリソファに座る。

そして牧村は、

「あつはつはつはつはつ」

狂つたように大笑した。

「うはははははつ、刑事さん。あなたの娘の罪は死してもまだ消えてらつしゃらないようだつ！」

「このつーー」

佐渡は飛び上がるよつて立ち上がり、牧村の顔面を殴り付けた。

「くつ」

堪らず牧村はよろめぐ。唇の端が切れ血が一筋垂れた。

それでも牧村は薄笑いをやめない。

「これは立派な傷害ですね」

「このつーー」

「やめてください警部つーー？」

頭に血が上り、またも牧村を殴り付けよつとする佐渡を、丸川が羽交い締めにして止める。

「ふふ。訴えたりしませんから安心してください。はは、なんせ僕は刑事さんのスト力ですかね。それに」

牧村は踵を返す。

「刑事さんに付き纏つていたおかげで、ほんとつて面白くなつてしまたし」

牧村は背中を向けたまま手を振り、部屋を後にした。

「牧村ああああああああああああーー！」

佐渡の怒号が虚しく響く。

「はあはあ、丸川放せ」

「でも

「けつ。殴りに行つたりしねえよ」

「そうですか？」

丸川は半信半疑に佐渡の拘束を解いた。

佐渡はもう牧村を追い掛ける気力もないといったように、フラフラとソファに腰掛け俯く。

卷之三

暫らくの静寂。

そして、

「嬢ちゃん……」

「え？！？」

ボソリと放たれた佐渡の言葉にかおりは耳を疑つた。

「でも」

「友達のことは事故だ。もう、これ以上関わるな」

「そんな

そんな風に言われてかおりが納得できるはずがなかつた。

「今まで来て事故？」
そんなはずない！

青いダイアモンドの呪い

一人がこれほどの反応を示した。

それでただの事故だと言われて、はいそうですかと引き下がれる

ものか。

「事故のはずか

「もう、勘弁してくれつー?」

佐渡は顔を上げ叫んだ。目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「もう、嬢ちゃんみたいな若いもんが死ぬところを見たくねえんだ

۱۹۸۷ء۔۔۔۔۔

卷之三

佐渡はゆきへつと立ち上がると、ふらふらとした足取りで部屋を

出よつとする。

「警部、どこへ？」

「煙草、吸つてくるだけだ」

丸川の問いに、佐渡は疲れ切つた様子で答えた。

屋上の塀に凭れ掛かり、佐渡は煙草に火を点ける。

「ふう」

脂を吐きながら天上に目を向けた。

今日はあいにく曇つていて星一つ見ることができない。

しかし、佐渡はほつとする。

天の頂で輝く月はどうことなくあのブル ダイアを彷彿とさせるからだ。

「ここにいたんですか、警部」

丸川が屋上に顔を見せる。

「喫煙スペ スにいなから探しましたよ」

そう言つて、丸川も佐渡の横で塀に凭れ掛かつた。

「なんか用か？」

「いえ、一緒に煙草でもと思いまして」

丸川は内ポケットから煙草を取り出し吸い始める。

「お前……煙草吸つてたつけか？」

佐渡は驚き丸川に訊ねた。

佐渡の記憶では丸川は禁煙派だったはずである。

丸川は苦笑いを浮かべ、

「最近吸い始めたんですよ。軽いやつですけど」と照れ乍ら言つた。

「ふうん……なんでまた？」

「なんですかねえ」

丸川は勿体ぶる。

そしてぼやくよつと言つた。

「……」「うう、仕事してると、吸わずにいられないっていつかはあんまり飲めませんからね……」

いつも頼りなげな丸川の顔が急に男のものとなつた
そんな気がした。

「因果な商売ですよね、刑事つて」

「こつちよまえな」と言こやがつて

二二七

佐渡はなぜか少し嬉しくなつて、それを誤魔化すように丸川の頭を小突いた。

なはがこ存しなんてやがて
とこにて嘗言 薩青の女

丸川は真剣な口調で訊ねた。

佐渡は無言で携帯灰皿を取り出し、吸い殻を入れる。そして、二本目の煙草に火を点けて、ぱつりぱつりと語り始める。

「淀川葵……。十年前……服毒自殺で死んだ女子高生だ。失踪から一週間後、通っていた高校の校庭で素裸で倒れているところを発見された。全身に……呪文のような刺青を彫られた姿で」

「全身に呪文のよくな……」

丸川は想像が付かないといった体で呟く。

「耳なし芳一、あれがイメジとしては近いだろ」「

「ああ、なるほど」

「もつとも、彼女の場合は長い髪はあつたし耳までびつしりと刺青が彫られていたがな」「…………」

全身に呪文の刺青を彫られた女子高生の遺体。服毒自殺なら外傷はなかつたのだろう。なのにこれをほど怖気を誘つるものもないだろう。

「煙草、灰が落ちるぞ」

「あつ」

丸川はあわてて自分も携帯灰皿を取り出し灰を中に落とした。

「それほんとに自殺、なんですか？」

そんな異様な遺体が本当に自殺なのか？

丸川は至極当然の疑問を投げ掛ける。

「当時も自殺か他殺かで議論は尽くされた。だが、結局のところ遺書が直筆だったのは間違いかつたし、原因もはつきりしていたから自殺と断定された」

「原因？」

「…………」

佐渡は深いため息とともに脣を吐き出す。

「いじめだよ。首謀者は…………」

佐渡は左手で両目を覆つた。

「俺の娘を含む同級生三人だった」

「あう」

丸川は言葉を失う。

佐渡は一本目の煙草も吸い終わり、吸い殻を携帯灰皿に押し込んだ。

そして、妙にさつぱりとした口調で言つ。

「娘もその二年後、交通事故で死んじましたよ」

「…………」

丸川は佐渡になんと声をかけていいか分からなかった。

佐渡は、もう吹っ切てるんだよ、と言わんばかりに軽く笑う。
「ははっ。そして淀川葵をいじめていた他の一人も同時期に事故で
亡くなつてんだな、これが

「つー？」

丸川は愕然とした。

「それってまさか…………」

「言つなつー！」

佐渡は丸川の言葉を強く制する。

「あれは事故なんだ」

佐渡は思いつきり壙を殴り付けた。

「あれは事故なんだよ」

「…………」

「そう自分に言聞かせたい、そう思い込みたい佐渡に、丸川はそれ以上言葉を発することはできなかつた。

それも、呪いだつたんでは などと。

翌朝。

「くつしょう！なにやつてんだよ、かおりのやつ」

圭介は携帯電話を弄くりながら葬儀場から出る。

さつきからかおりに電話をかけているのだが通じないのだ。

「昨日も、勝手に帰つちまうしょつ」

「やあ、田中圭介くんだね」

葬儀場の敷地を出たところで突然、圭介は男に声を掛けられる。男は真つ赤な単車を乗り付けていた。

「…………」

「僕はこいつものなんだけど」

怪訝そうに押し黙る圭介に男は名刺を差し出した。

名刺には毎朝新聞記者・牧村宗也とある。

「きみは一昨日亡くなつた田中さやかさんの弟くんだよね

「くつ」

圭介は牧村の言葉にイラついて眉間に皺を寄せた。

しかし、牧村は気にせず話を続ける。

「きみは知つているのかなあ？ブル ダイアモンドの呪いを

「？」

「羽を象ったペンドントの先についた青いダイアモンド。きみは見たかい？」

「あつ」

圭介は思い出す。さやかが死ぬ前の晩、嬉しそうに見せびらかしていたペンドントのことを。

「その様子じやあ知つていいよつだね」

「…………」

「実はあのダイア。お姉さんが転落したときにペンドントから外れたようでね、それを拾つて持ち帰つた女の子が昨日、母親共々亡くなつているんだよ」

「なつ！？」

圭介の顔色が驚愕と変わつた。それを面白く思つた牧村は得意げに告げる。

「ふふ。そして昨晚、お姉さんの友達のかおりちゃんが二コスを見てそのことに気付いてね、刑事さんに話していたんだよ」

「かおりがつ！？」

「そう。あの青いダイアモンドは呪われているつてね。かおりちゃん、ずいぶん思い詰めていたみたいだよ」

「…………」

圭介は信じられないといつた様子で口を手で押された。その様子を見る牧村の表情は至極恍惚に満ちている。

「ふふ。そうそう、話は変わるけどあの青いダイアモンドはね、実は七年前にも人を殺しているんだよ」

「つ！？」

「少なくとも確實に三人は殺されている。どう？興味が湧かない？」

「なんで俺にそんなことを」

「なんでかな？」

解せないと声を震わせ訊ねる圭介に、牧村はとぼけたように言つ。

「そうだね。敢えて言うなら、きみには知る権利があると思つたか

ら かな？」

「…………

「興味があるならその名刺の裏に書いてあるコードでアクセスしてよ」

圭介が不審そうに名刺を裏返して見ると、セイヒはボルペンでウェブペジのアドレスが書かれていた。

「ペジが開かれたらまず、パスワードを打つよ。ついでにしているんだ。パスワードは

牧村の瞳に深い濁った光が灯る。

「『青いよどみにひかれて』

「青いよどみ……」

圭介は慄然と咳く。

“青いよどみにひかれて” その言葉に底知れない不安を覚えた。

「きつと面白いものが見れるよ」

「くつ」

圭介はそこまで聞くと駆け出した。

牧村はそんな圭介の背中を見送り、

「いい」

舌舐めずりをする。

いつみてもいい 被害者の遺していくたものたちの、苦しみや哀しみに歪む表情 そして、真実を突き付けられたときの、驚きと猜疑心に満ちた表情は。

「さて、そろそろ事件の首謀者にも『』登場願おうか」

牧村はヘルメットをかぶると、真っ赤な単車に股がり走りだした。

かおりは自宅ダイニングでパソコンの画面と睨めっこしていた。

昨晩、警察署から帰ってきてからさやかの通夜にも顔を出せずにずっと、寝ずにパソコンを弄くっている。

それはブル ダイアモンドの呪い そして、刺青の女のこと
を調べるため。

「…………」
ブル ダイアモンド、いわゆるホ プダイアについてはずいぶん詳しくなった。

ホ プダイアが歴史に登場したのは1666年。寺院の石像の中に埋めてあつたブル ダイアモンドをフランスの貿易商が取り外して加工し、ルイ14世に献上したことが始まる。その後、そのフランスの貿易商は破産しインドからの帰りに溺れかけ、せうに帰国と同時に野犬の群れに襲われ食い殺された。

後にブル ダイアモンドはマリ・アントワネットのもとに渡り、彼女はフランス革命に巻き込まれ処刑。

その後もダイアの呪いの猛威は止まることを知らず、ダイアを盗んだ宝石商の息子は自殺。ときを経て、入手したイギリスの実業家ユリアソンは数日後に落馬で死亡。

1839年、ブル ダイアモンドはロンドンのオ クションに出品され、それを落札した実業家ヘンリ・フィリップ・ホ プは数年後に破産し彼自身も死亡。その後、ホ プ家が四代に渡つてダイアを所有するも一族の威光は地に落ちていった。

その後、カルティエのもとを経てアメリカの新聞王エヴァリン・ウォルシュ・マクリン婦人へ渡り、マクリンの息子は交通事故で死亡、娘も睡眠薬の飲みすぎで死亡し、その数カ月後にマクリン婦人も肺炎で死亡した。

牧村の言つたとおり、ここまでの実例が列挙されれば宝石の呪いは実在するかもしれない。

「…………」

しかし、かおりの知りたかつたのはその伝説のダイアモンドのことではない。

さやかの手にしたあの小さなブル ダイアモンド。

そして、大の男二人の顔色を変えた刺青の女 そのことに関するは一向にヒットする気配がない。

「ふう」

いい加減かおりが疲れ果ててきたところで家の呼び鈴がなつた。かおりの家は古いアパートでありダイニングに直接玄関がくつついでいる。

かおりが玄関扉の覗き穴から覗くと、圭介が不機嫌そうに立っていた。

「圭ちゃん」

「なんで電話にでないんだよ」

かおりが玄関を開けると、圭介は開口一番に文句を垂れた。

「あつごめん。たぶん携帯バックの中で気付かなかつた」

「…………」

圭介は勝手知つたると、かおりの家に上がり込む。

かおりは圭介に出そと冷蔵庫から麦茶の入つたペットボトルを取り出し、グラスに注いだ。

「かおり」

圭介は深刻な口調でかおりの背中に問い合わせる。

「ブル ダイアの呪いつてなんだ?」

「つ! ?」

圭介の言葉にかおりは固まつた。麦茶がグラスから大量に溢れ、かおりは慌ててペットボトルを立てる。

「なんで……」

かおりはゆつくりと振り替える。圭介の顔はいつになく険しい。

「今、牧村つていう新聞記者に聞いた」

「…………」

かおりはよろめく。

『もう、これ以上関わるな』

そう自分に告げた刑事の言葉

が急浮上してくる。

圭介にはこのことに関わってほしくなかつた。

圭介を巻き込みたくないということ それ以上に、圭介には自分の罪を知れたくない。

「パソコン借りるぞ」

圭介はイラついた様子で言い、今の今までかおりが使用していたパソコンの前に座る。

そして、ポケットから名刺を取り出し「JR」を打ち込み始めた。

「なにをつ！？」

かおりは慌てて圭介の後に回り込む。

圭介がエント キ を押すと、

「これは ?」

なにかのウェブペ ジが開かれた。

画面いっぱいに薄暗い水面の波紋を広げているCGが映っている。圭介がマウスを操り、エントリ のアイコンをクリックするとパ

スワ ド入力画面が表れた。

そして圭介はゆっくりとキ ボ ドで打ち込む。

“青いよどみにひかれて”と 。

8

佐渡はブル ダイアモンドを持つて科搜研に向かつた。

「あら、惣一朗」

科搜研の相沢麻衣子は訪れた佐渡に親しげに挨拶する。

「最近、響子が電話かけても繋がらないことが多いから、また無茶なことしてんじゃないかって心配してたわよ」

麻衣子は佐渡の幼なじみであり、佐渡に麻衣子と大学が一緒だった元妻・響子を紹介した仲人でもあった。

「けつ 大きなお世話だ。別れて十二年もなるのに、とやかく言われる筋合いはねえよ」

「あら。感謝料が滞つたら困るから言つてんでしょう、きっと」

「あつ そりがよ」

佐渡はいじけたように外方を向く。内心、元妻に心配されたと思って少し嬉しかつただけに余計腹が立つ。

「そんなことより、仕事だ」

「これを調べればいいの？」

麻衣子は、佐渡に手渡されたビニールに入ったブルーダイアモンドをしげしげと見つめて言つた。

「成分分析すればいいの？」

「できることは全部やつてくれ、科学者の意見が聞きたいんだ」

「急ぎなの？」

「ああ、なるべく急いでほし」「うーん」

佐渡の以来に麻衣子は渋るように唸つた。

「実はさあ、未明にひき逃げ事故があつて、今日はその塗料の分析とかに追われそうなのよね」

「たのむ」

「わけありなのね」

いつになく真剣な幼なじみの頼みに、麻衣子はしようと頷く。

「わかつた。頑張つてはみる」

「すまない」

「はいはい。忙しくなりそだから帰つた帰つた」

おじけた調子で麻衣子が佐渡を追い返そうとするが、

「麻衣子、気をつけろよ」

佐渡が重々しく麻衣子に釘をさした。

「なにが？」

「そのダイアを持った人間が立て続けに死んだんだ。俄にそのダイ

アの呪いじやないかつて話もでてきてる」

「呪い？馬鹿馬鹿しい」

麻衣子は佐渡の言葉を笑い飛ばす。

「呪いだつて馬鹿にできねえぞ。現にスプロンダイアつていう、馬鹿でかい宝石が

「それホブダイアでしょ？どういう脳の構造でスプロンになるのよ」

恐らく、ホクと間違え、さらにスプロンなつた二段階構造である。

「だいたいね。そのホブダイアだつてたんなるこじつけよ。あんな高価な宝石を欲しがるのは物欲が強い人間つてことでしょ？物欲が強いイコール、リスクな生活を送りやすいから自ずと破滅傾向にある。マフィーの法則つてやつよ。それに世の中に不幸な目にあつて死ぬ人間なんか何人いるのよ。だいたいね、そのホブダイアを最後に所有していたウイストン氏は十年間ダイアを持ってたけど、これといって不幸な目にあつたつていう話はないんだから」
生粋の科学者である麻衣子は呪いなどという非科学的なものをまったく信じていない。そんな彼女に佐渡は圧し殺した声で告げる。
「そのダイアを持つて死んだ女子高生が、あの淀川葵の死んだときの姿を見たと言つてたとしてもか？」

「つ！」

そこにきて麻衣子の顔色が変わる。

麻衣子も淀川葵のこととは知っていた。

「俺だつて呪いが本当にあるなんてことは信じちやいねえ。ただ

」

佐渡は沈痛な面持ちで口籠もある。

当然、麻衣子は淀川葵をいじめていたのが死んだ佐渡の娘・美保だと知つており、その美保とも交流があつた。

麻衣子から見て、ひいき目を覗いても、美保は利発で明るい子でとてもいじめの首謀者になるような娘には思えなかつた。

今更、十年も前の、それもすでに亡くなつた娘の過ちを穿り返さなければならぬ佐渡の辛い立場も、麻衣子は十分すぎるほど理解できた。

「わかつたわ。細心の注意は払う

麻衣子は佐渡に対しての同情の意味も含めてそう告げる。

「気をつけろよ」

一度目の忠告を口にして、佐渡は科捜研を後にした。

佐渡は丸川を連れ市内にある養護施設を訪れる。

「お待たせしました」

応接室で佐渡たちが待つてゐると、施設の園長である中年女性がやつてきた。

「園長の加藤です」

園長は刑事一人に慇懃に礼をする。

「さつそくですが

」「

形式的な挨拶をすませ、佐渡は園長に話を切り出す。

「十年前亡くなられた淀川さんのことでしたね」

「はい」

「正直、今思い出しても心苦しいですよ

園長はそう言つて涙ぐむ。

「淀川さんはホントにいい娘さんでしてね。生まれて間もなく母親を病氣で亡くし、父親も彼女が小学生の頃に事故で亡くして……それでも彼女は不幸な生い立ちにいじることなく、一生懸命勉強して公立の進学校にまでいって それがあんなことになるなんて

「心中お察しします」

佐渡は小さく頭を下げる。

佐渡は必死で心が潰れそうになるのを堪えた。

そんな娘をいじめぬいて殺したのは自分の娘なのだ。

「それで、淀川さんの葬儀のことなのですがそれは「ひりの園で？」

丸川が園長に訊ねる。

「ええ、国からの補助金もでましたので私どもが喪主を務めました」

「遺骨の方はどうぞ？」

それが本題である。

立て続けに死んだ人間が持っていたブル　ダイアモンド。それは遺灰から作られたものであった。

そして佐藤かおりの証言により、そのダイアの基となつた遺灰は、十年前、全身に呪文の刺青を彫られた姿で自殺した淀川葵のものではないかという推理が成り立つのだ。

「遺骨は確か、赤井くんが引き取つていかれたんじゃなかつたかしら」

「赤井？」

「ええ、赤井修一くんです。ちょっと待ってください」

園長は立ち上がり本棚からアルバムを引っ張り出してくる。

「！」の子です」

園長はそう言って佐渡たちにアルバムを見せた。そこには学制服を着た少年が写っている。

「この子もこの園の？」

「はい」

佐渡の問に園長が頷く。

「淀川さんより三つ年上で、淀川さんが亡くなつた当時はもう、社会人になつて園は出てましたけど。とても小さい頃から、淀川さんと親しくて、たぶん当時は恋仲だつたんだと思います。葬儀の席で自分が責任持つて供養するからと書つので、私たちもその方が淀川さんが喜ぶと思い任せました」

「…………」

佐渡は内心信じられないといつ思いでいっぱいだった。

当時、淀川葵の自殺は話題となり、いじめ問題は刑事案件にまで発展した。にも関わらず赤井修一の存在は浮上していない。遺骨を

引き取るほどの恋仲だつたのなら、刑事裁判の証人や民事訴訟の原告として名乗り出でるのが普通であろう。

淀川葵のいじめ問題において、佐渡の娘を含む加害者の罪の追求に一番尽力をしたのはあの牧村である。

衝撃で固まる佐渡の代わりに丸川が園長に訊ねる。

「その赤井修一の居場所は分かりますか」

「いいえ」

園長は頭を振つた。

「淀川さんの葬儀の後、数か月くらいして赤井くん私たちにも告げずに住んでいたアパートを引き払つてしまつたようで、それからはぱつたりと連絡はないんですよ」

そこまで聞いて佐渡たちは園長に暇を告げた。

佐渡は車の助手席に乗り込むと俯いて目を瞑つた。

「大丈夫ですか、警部」

運転席の丸川が佐渡を気遣う。

「ああ」

佐渡は目を瞑つたまま答えた。

「丸川、署のやつらに指示しろ。遺骨ダイア製造の会社に赤井修一の依頼デ タがないか。赤井修一の現在地。そして

佐渡は顔を上げ吠える。

「牧村をしょっぴけ」

やつは必ずなにか知つてゐるはずだ。

郊外にある小さな町工場で赤井修一は働いていた。恋人をあんな形で亡くしてからというもの、職も住むところも転々とし、最後に行き着いたのが静かで誰も自分を知るものがない小さな町だつた。

都会の喧騒が軋む心を誤魔化してくれると思つた時期もあつた。それでも過去は変わらず自分を責め立てる。

結局、過去のない場所での時間だけが自分の居場所となつていつたのだった。

今では新しい婚約者もできた。工場の社長の娘だ。

修一の歯車は十年達て少しづつ回り始めていた。

「修一さん、お客様ですよ」

修一が工場で作業していると、婚約者で事務員でもある美智子が彼を呼びにきた。修一は作業を中断し、美智子のもとへ。

「お客様なんつて？」

「あちらの方ですよ」

美智子が指示した先を向くと、真っ赤な単車を乗り付けた男が立つていた。

「牧村さんっ！」

修一の顔が晴れる。彼は嬉しそうに牧村のところまで走った。

「お久しぶりです、牧村さん」

「ええ」

修一と牧村は堅い握手を交わした。

昔、牧村は淀川葵のいじめ問題について加害者側の罪を徹底的に追求したことがある。そのことに少なくとも修一は感謝の念を抱いていたし、その後も牧村が修一の借家の保証人になつたり、何度か就職の世話をしたりしており、修一にとつて牧村は感謝してもしえない大恩人であつた。

「彼女が？」

軽く会釈をして事務所に戻つた美智子を見て牧村は訊ねる。

「この間、電話でお話した婚約者です」

「へえ、とても人柄のよさそうな方でよかつたじゃないですか」

牧村はいつものような嘲笑ではなく、心底喜ばしいと優しく微笑んで言つ。

「ええ、僕にはもつたいたいないくらいの女性です。ところで、今日は？」

「少し訊ねたい」とがあつてきましたが。修一くん、昨日は一斗
スをご覧になられましたか？」

「あついえ」

修一は極力ニコスを見ないようになっていた。昨今のニコスは悲しい事件の報道が多くすぎる。それを見ると自分の過去に触発されてしまうからだ。

昨日、幼い女の子と母親が不審死する事件がありましてね。その

牧村はそこで声を潜め修一に耳打ちする。

「國語」

修一は絶

「その前の日も、青いダイアを持っていた女子高生が死んでいる」

卷之三

「それは本当ですかっ！？」

「ええ」

物語に神妙に詠く

ГЛАВА

「おう」

修一は泣きそうになつて牧村の顔を見る。

尊厳を失していかん間に自分の顔を見扱がれていたが、うなづいてはまつた。

い殺すために

一
違
二

修一は懇願するよて頭を振る。

そんな修一に牧村は囁き、

とどめを刺した。

「それでは失礼」

「待つて 待つてよ、牧村さん！」

縋るように助けを乞う修一を残し牧村は単車を走らせる。

「牧村さんっ！」

サイドミラーに走つて追い掛けてくる修一が写る。やがてそれは

小さくなつて消え失せた。

「ふははははははは」

牧村は単車を走らせながら大笑する。

赤井修一 お前は本当にいいおもちゃだった。恋人を失つたときの絶望も、仇を取つたときの罪悪感も、俺をいい人と疑わなかつたその純朴なところも、全てが快樂の糧となつた。

だが、ここいらが潮時だ。

お前が過去を忘れ、幸せを手にするというな。

「いらないおもちゃはごみ箱行きだ」

新しいおもちゃも手に入れられそうだからな。

“青いよどみにひかれて” それは十年前、獵奇的な自殺を遂げた淀川葵に関する事柄を牧村の主觀によつてまとめられたウェブページだった。

20XX年・12月25日早朝、巡回していた守衛が校庭の真ん中で倒れている淀川葵の遺体を発見する。素裸に全身梵字のような呪文の刺青が彫られており、その遺体はまさに異様の一言に尽きた。

淀川葵はその一ヶ月前から失踪しており、警察に捜索願いがだされていた。

失踪してから遺体となつて発見されるまでの一ヶ月間、淀川葵がどこで何をしていたのか警察は捜査したが有力な手がかりはえられていらない。記者は、呪いを信仰する宗教団体に隔離されていたという噂を耳にするが、いずれにせよ根拠は見当らなかつた。

淀川葵の死因は毒物の服用による中毒死であつた。当初、その尋常ではない姿や脱がれた衣服が見当らないなどの理由から、他殺か自殺かで議論がなされたのだが、彼女の自室から大量の遺書が発見されたことにより当局の見解は自殺に落ち着いた。

〔遺書の抜粋〕

記者は遺書の概要を入手することに成功した。ここではその一部を抜粋する。

『わたしはこの数か月の間、同じクラスの高橋美保、佐々木あすか、安達ちひろの三人にひどい仕打ちを受けてきました。

(中略)

はじめは中間テストの結果発表の後、高橋さんたちにわたしがカニシングしたのだろうといちゃもんをつけられたことから始まりました。わたしがそんなことしてないと言つても、乞があんな成績取れるはずないと罵られ殴られました。

(中略)

いじめはだんだんエスカレートしていき、他のクラスメイトまでわたしを無視するようになりました。原因は高橋さんたちが学校裏サイトとかいう掲示板にわたしのあることないことを書いていたからだと思います。

(中略)

わたしは幼い頃に両親を亡くし、よくいじめられたりしたので今回のことにも堪えようとしました。でも、もう堪えられない。あいつらは、わたしの命だったものを便所で紙屑と一緒に流した。絶対許さない。(後略)』

このように、淀川葵は壮絶ないじめにあり自ら命を絶つたのだ。

「加害者の横顔とその後」

ここで淀川葵をいじめぬいた三人のことに触れたい。

三人の中での中心的存在だったのが高橋美保である。彼女は中学の頃からトップクラスの成績であり、高校に入って自分よりも成績が上だった淀川葵が気に食わずいじめという非道な行為に走ったと推測される。

ここで特筆したいのが、高橋美保の父親は警視庁の刑事であることだ。自分の娘の管理もできない人間が、果たして市民の安全を守ることができるのであるのか。

高橋美保・佐々木あすか・安達ちひろの三人は当然刑事告訴されるが、被害者が自殺しているいじめ事件の罪の実証は難しく、結局三人の問われた罪は学校裏サイトに書き込まれた淀川葵に対する誹

謗中傷（中にはヌード写真と淀川葵の顔をコラージュした写真まであつた）における名誉毀損のみであつた。よつて、三人には執行猶予つきの判決が下り、事実上のお咎めとなつた。

これでは淀川葵の死は報われない。被害者は苦しみ、のた打ち回り死を選んだのにも関わらず、加害者は実名報道もされぬまま残りの人生をエンジョイするのだろうから。

と、ここまでは連日の報道でご存じの方もいると思つ。

しかし、事件は終わつていなかつた。

淀川葵の死から一年後の10月9日。定時制高校に通つていた高橋美保が登校中、大型トラックに跳ねられ即死する。

同日深夜、アルバイト先から帰つてきた佐々木あすかはエレベタの転落事故により死亡。

さらに翌日、安達ちひろは予備校の屋上から転落死した。彼女たちの首にはお揃いと思われる、ブルーダイヤモンドのついたペンダントがしてあつた。

これは果たして偶然なのだろうか。

淀川葵の遺体に彫られた異様な刺青、あれはまさしく彼女が死に際に残した呪いなのではないだろうか。

青いよどみを灯すダイアモンド。

淀川葵は自らの命を武器に復讐の罠を用意していたのだ、そう記者には思えてならないのだ。

そのサイトには、このような文章とともにこまめまな写真も公開されていた。

高橋美保・佐々木あすか・安達ちひろの三人の写真も実名で曝されている。

そして、淀川葵の生前の写真。そして、どこから手に入れたのか、

あの刺青が彫られた遺体写真まで公開されている。

そして最後のページに張りつけてあったのは、

「ブル ダイヤモンド」

かおりはフローリングの床にへたり込む。画面上にでてきた、

青い光を灯す宝石を望んで。

「かおりっ！？」

圭介はしゃがみこみ放心するかおりを揺する。

「わたしのせいだ」

「えつ！？」

「わたしのせいでもやか死んだんだ」

かおりは茫然と呟いた。そんな彼女に怒氣孕んだ声で圭介は問う。

「なに言つてんだよ、かおり」

「だつて、あのダイアのペンダントはわたしが見付けたの！」

かおりは叫んぶ。

「あの露店を見付けたのもわたし。わたしが買おうとして……でも、お金が惜しくて渋つたから、さやかが買って……わたしが

「違うっ！？」

「違わない。さやかはわたしの身代わりなつて……くつくつ泣き崩れるかおりを圭介は抱き締める。

「頼む、かおり。そんな風に思わないでくれよ」

圭介も泣いていた。

「だつて……」

「俺はそんなこと思わない。思いたくない！たとえ、あのダイアが呪いのダイアだつたとしても、かおりは悪くない」

「…………」

「俺は誰かを恨んだりしない」

圭介は声を震わせて言つ。まるで自分に言聞かせるよう。

「たとえ、淀川葵の呪いが姉ちゃんを殺したんだとしても俺には姉ちゃんより大好きな人が目の前にいるから、守らなきゃいけないから

「

「圭介や」

圭介はかおりの言葉を自身の唇で塞ぐ。
それは二人にとって初めてのキスだった。
涙と鼻水で少し塩つぱかった。

11

時刻は午後九時を回る。

「警部、やはり宝石製造の委託会社のリストに赤井修一の名があり
ました。七年前のものだそうです」

「そうか」

部下の報告を受け佐渡は小さくため息を吐いた。
予想どおりだった。七年前といえば娘の美保が事故死した年である。

やはりあのダイアが……。

「赤井の現在地は？」

「それがまだ」

「牧村はっ」

「所在不明です」

怒鳴るように訊ねる佐渡に対し、部下の一人は申し訳なさそうに
答える。

「くそおー！」

佐渡はぐうで思いつきリテ ブルを殴り付けた。

佐渡の苛立ちが捜査本部を凍り付かせる。

そのおり、

「警部つー！」

丸川が息を切らせて飛び込んできた。

「赤井修一と名乗る男が母子殺害捜査本部の責任者に面会を求めて

きました」

「なにつ！？」

向こうからやってきた……。

赤井修一はすでに応接室に通されていた。佐渡は丸川を連れ猛然と応接室へ向う。

「あんたが赤井修一さんか？」

佐渡の問い掛けに修一は力なく首肯ぐ。

そして圧し殺した声で、

「ダイアは…………ダイアはどこだ……」

修一はそう訊ね返した。

「やつぱりあんたがあのダイアを作ったんだな。委託会社に記録が残っている」

「ダイアはどこだつ！？」

佐渡の問いに聞く耳もたず、怒鳴るように訊ねる修一。

「質問に答えるつ！お前はあのダイアが呪われていることを知っていたのかつ！？」

佐渡も負けじと怒鳴り返した。互いの焦りが応接室の空氣の密度を濃くする。

「知つてたさあ」

修一は溢れ出そうになる感情を必死で押さえこむように歎いた。

「それが葵の最後の頼みだつたからな」

「つー？」

佐渡の息遣いが荒くなつていく。

それに呼応するかのように修一も捲くしたてた。

「葵が死んだ日の朝、僕のところにも遺書が郵送されてきた。自分の遺骨でダイアを三つ作つてほしいと。それはきっと呪いのダイアになるから、あの三人に送り付けてほしいって。僕は必死で働いて金を稼ぎ、ダイアを作つてあいつらに送り付けた。半信半疑だったけど、それで葵が報われるならつて

「てめえが

「

「警部っ！」

佐渡が修一に掴み掛かるとする。それを丸川が寸でのところで制した。

「てめえが娘を殺したのかっ！――」

「娘……」

修一が血走った目を佐渡に送る。

佐渡は叫んだ。

「高橋美保は俺の娘だつ！――」

「つ！？」

それは魂の叫びだつた。

修一の口元が怒りで激しく歪む。

「てめえが娘を なんの関係のない女の子まで巻き添えになつた

「

「あなたの娘が葵を追い詰めたから悪いんじやないかっ！？

あんたが、娘のしつけもできてなかつたから悪いんじやないかっ

！？」

「くあ…………」

佐渡と修一、その両者の目から涙が零れ落ちる。

「葵がどんな思いで死んでいったのか 僕がどんな思いである

ダイアを作つたのか あんたにわかるのかつ！？」

修一は蹲る。

当時の感情が爆発的に蘇つて。

どんなに時間が経とうとも、忘れることができたと思つても、過去は今に追い付き遺されたものたちを蝕み続けた。

葵のお腹の中には僕の子供がいたんだ。

「修ちゃん。わたしもう駄目みたい

葵は虚ろな目で僕に言った。

妊娠一ヵ月でまだ目立つていなかつたとはいえ、

僕たちの愛すべき小さな命は、あの三人の執拗な暴行によつてこの世から消え失せた。

「ゆるせない。ゆるせないよ」

葵は声を震わせる。

「でも、一番許せないのはわたしなの」

「だつて、修ちゃんとの子供殺されたことよりお母さんの形見のダイアを、便所の紙屑と一緒に流されたことの方が　辛いだなんて」

葵はいつも小さな青いダイアモンドがついたペンダントを付けていた。

いつか聞いたことがある。それは病死した母親の遺骨から作られた形見のダイアなのだと。

「ごめんね。修ちゃん　　ごめんね」

震えて謝り続ける葵を見て、僕は決心して立ち上がつた。

僕だつて葵と同じ気持ちだつた。

まだ見ぬ消された命よりも、いま田の前で傷つけられた葵を見ているほうがよほど辛い。

「殺してやる。僕がお前をいじめた奴らを全員殺してやるつー!?」「やめて」

熱り立つ僕の足に葵が縋つた。

「なんでだよつー?お前をそこまでいじめた奴なんか生きてる価値なんかないだろつー?」

「わかつてゐ!わたしだつてそう思つー!」

だけど、そんな人たちのために修ちゃんが捕まるなんておかしいよつー?」

「葵……」

「わたしも修ちゃんもなにも悪いことしてないんだよ。それなのに修ちゃんだけ捕まるなんて、わたし堪えられない」

葵はこのとき、本当に身も心もボロボロになつていた。

そんな彼女を支えるためにも、今、自分が捕まるわけにはいかない、僕は犯行を思い止まつた。

でも、すぐに後悔することになる。

葵がなにも告げずに失踪したからだ。

必死で捜し回つたが、一ヶ月後彼女は見る影もない姿で自ら命を断つた。

最後の我慢なのだと、俺に『青いよどみ』作つてほしいと言つて。

「嘘だ」

佐渡は頭を抱え崩れる。

「美保が 赤ん坊の命まで そんなあ

誰かをいじめぬくのも十分大罪だ。

でも、それだけじゃなく生まれてくるはずだつた命さえも娘は奪つていたのだ。

「あう あ……」

なにをどうしたらいいのかわからぬ。

佐渡は呼吸の仕方さえも忘れそつになつていた。

「警部つー！」

丸川が力強い口調で声を張り上げた。

「あのダイアを処分するべきです！」

「つー？」

佐渡ははつとなる。

「科学的根拠とか、証拠品だとかそんなの関係ないーーあれはこの世にあつちゃいけないものですつー！」

「麻衣子つー？」

佐渡は慌てて携帯電話を取出しダイアを渡した科搜研の相沢麻衣子かける。

「早く出ろ、早くつ！..」

一向に繋がらない。ツルルルという呼び出し音の流れる分だけ、佐渡の不安が増大していく。

そして不安が的中した。

「警部つ！」

部下の一人が応接室に飛び込んできて告げる。

「科搜研の相沢先生がつ

」

科搜研の相沢麻衣子は割れたビカ力の破片で首を切られ絶命した。

麻衣子の部下が涙ながらに語る。

「相沢さん、ここのことろ徹夜が多くて、僕帰つて休むように言つたんです。でも、まだ調べごとがあるからつて、僕も手伝つて言つたんですがほとんど私的なことだから自分だけでやるつて言つて、ダイアを検査機にかけてそのソファで仮眠なされたんです。僕はそれを見てから、帰宅したんですがこんなことに

」

佐渡は幼なじみを亡くした哀しみと、自分への怒りで、気が狂いそうになるのを必死で押さえて叫ぶ。

「ダイアはつ　ダイアを探せつ！..」

佐渡の指示で部下たちが一斉にあのブル　ダイアモンドを捜索し始める。

だが、

「どこにも見当りません

検査機の中からも、物やガラスが散乱した床や机の上にも、どこ

にもない。

「くそ、なんでないつ！？」

打ち拉がれる佐渡に、丸川が警備室から戻ってきて告げる。

「警部、この部屋の監視カメラの映像見れるそうです」

「分かつた」

佐渡は丸川と共に警備室へ向かつ。

警備室の小型モニタ にあの部屋の一時間くらい前の映像が映し出された。

「…………」

俯瞰ふかんで映し出される部屋。

ソファ で麻衣子が寝息を立てている。

回転式のリモコンで早送りしながら見ていると、 麻衣子の様子が変わった。

「ストップ、巻き戻して」

どうやら、麻衣子は夢にうなされていようだ。

暫らくして彼女はがばっと体を起こす。

キヨロキヨロと辺りを見回したかと思つと、 今度は一点を見つめて固まる麻衣子。

麻衣子は跳ね上がるよつに立ち上がって、

『嘘よ。なんで……』

なにかに怯えるように後退りする。

『そんな、なんであなたが』

バリン

突然、机の上にあつたビ 力 が音を立てて破裂した。

『いやあ』

麻衣子が後向きにすつゝひびく。

ビ 力 の破片が宙に浮き、

『ひい』

麻衣子の喉元を切り裂いた。

麻衣子はびくんびくんと痙攣して床に倒れ臥す。

白い床に赤い鮮血が広がつていった。

「…………」

佐渡は口元を手で押さえる。

幼なじみの死ぬゆくシン　とても見ていられるものではない。

それでもなにかの手がかりになるかも知れないと、佐渡は目玉をひん剥いてモニタを見続ける。

それから暫らくして館内の人間がどつと駆け付けてきた。麻衣子の生死を確認しようとするものもいるが、ほとんどが野次馬と化している。

「止めろっ！」

佐渡が怒鳴るようにリモコンを操作している人間に指示を出した。画面がストップモーションに切り替わる。

「見ろ」

「これは

佐渡の指差す先に一人の男が映っていた。

「牧村っ！」

丸川が唸る。

そして佐渡は叫んだ。

「牧村だっ！！牧村がダイアを持ち去つた！牧村を捜し出せつ！？」もう一人もあのブル　ダイアモンドの犠牲者を出してはなるまいと。

かおりは帰宅し深いため息を吐く。

その後、圭介と共に葬儀場へと行き、さやかの葬儀に参列した。

葬儀はつつがなく進行し、火葬とその後に行なわれた親族の集ま

りにも手伝いとして参加したので、こんな晩くになってしまった。

かおりの母親も仕事を抜け出し葬儀には参列したが、仕事がまだ

残っていると早々と退散していった。

まだ帰りつていないとこらを見ると、かなり忙しそうだ。

「はあ」

かおりは制服のままベッドにダイブする。

こここのところまともな睡眠が取れていなかつたため疲れ果てていた。

田を瞑ると、細かい夢を見ては、現実に引き戻され、また夢に入れる。

うつらうらしていると、やがてかおりは本格的な眠りに入つていった。

「警部つー！牧村宗也をしょっぴきました」

刑事二人に挟まれて、牧村が捜査本部へ連行されてきた。

「刑事さん。逮捕状もないのにこの扱いはないんじやないですか？」

牧村は余裕の笑みを浮かべ佐渡に申し立てる。

「緊急逮捕だ」

佐渡は目を血走らせ唸つた。

「ふつ緊急逮捕？罪状は？」

「宝石の窃盗罪だ」

それを聞き牧村は大笑して言つ。

「アツハツハツハツ！窃盗」ときで緊急逮捕が成立するんですか？

それに証拠があるのかも疑わしい

「証拠ならある。てめえの姿が麻衣子の死んだ現場の監視カメラに映つていたっ！」

「ふふ、それだけでは証拠とは言えないでしょう」

「てめえいい加減にしろっ あのブル ダイアをビリへやりやがつたつ！？」

佐渡が怒鳴り、牧村に掴み掛けた。

「牧村さんっ！？」

署で待たされていた、赤井修一が捜査本部に飛び込んできた。

「牧村さんがなにかしたんですか？」

修一は動搖を隠せない様子で、佐渡に訊ねる。

そんな修一を見て牧村は嘲笑う。

「ふつまだ、生きてたんですか？ 修一くん」

「へっ？」

修一は耳を疑う。

「あなたの作った宝石で少なくとも四人の無関係な人間が死んだ。いや、表ざたになつていないだけで、或いはこの七年間で大量の骸を生み出しているのかもしぬ。それでもきみはおめおめと生きてられるのかい？」

「そんな、牧村さんなんで」

修一は信じられないと崩れ落ちる。

葵が死んで十年間、修一にとつて牧村は本当に優しく、身内のない彼にとつて兄や親以上の存在だった。なのになぜ。

「そういえば刑事さん。あんたも彼と同罪ですかね」

「つー？」

「私が散々、宝石の呪いについて忠告して上げたのに、あなたはお友達の科学者にあの宝石を預けたりして二タニタと笑いながら牧村は言つた。

「牧村あ！」

「落ち着いてください、警部！」

牧村に飛び掛けたとすると佐渡を丸川が制する。そして、丸川は牧村を睨み付けた。

「牧村宗也。お前がもし、宝石を盗んだとして、お前ならビリへ持

つていいく。誰に渡す

「…………」

牧村は無表情になつて丸川から目を逸らした。

「…………」

落ち着け、考える。

丸川の言つとおり、今はこいつの挑発にのつてている場合じやない。
佐渡は必死で冷静になろうとする。

俺が牧村ならどうする。牧村はなにを求める。牧村はなにがしたい。

佐渡は床に泣き崩れている修一に目をやつた。

「つー？」

佐渡の脳裏に一人の顔が思い浮かんだ。

一人は娘の美保。

そしてもう一人は

「まずいっ！」

佐渡は走りだしていた。

「…………」

かおりは夢を見ていた。

とてもリアルな、そして悍ましい夢を。

『てめえ生意氣なんだよつー!?』

『乞が学校くんな!』

『臭いんだよつー!』

女の声で罵倒され続ける。

頭を押さえ付けられ、お腹を蹴られる痛みが異様に生々しく感じ

られる。

『やめて、助けて』
自分のものではない助けを『ひつ声が自分の口から発せられる。
やがて場面が切り替わる。

黒いパソコン画面だ。

名無し 淀川葵は援交してるので。
名無し まじでえ！さすが乞（笑）
名無し 男のナニしゃぶった金でシャ やってるんでしょ？
名無し アハハハ、洒落きてる（爆）
名無し 便所がまじ学校くんなつ！
名無し 消えろ、淀糞が！！
名無し 死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

永遠に書き込まれる罵詈雑言の数々。

淀川葵の裸の写真がアップされた画面が現われ、一円でなんでもしますと下に書かれてある。

水の流れる音。

『なんでこのがこんなものもってんだよ』

『パパに買ってもらつたんだろ』

『生意氣い』

『お願いやめて、それはママの形見なの』

葵の懇願する叫び声。腹に激しく蹴り付けられる衝撃。

青い宝石が水洗便所に流されていく。

そして、世界は真っ暗になった。

『殺してやる』

不気味な声が世界に響く。

『殺してやる』

淀川葵つ！？

あのウェブページで見た彼女の遺体とそっくりな姿が現われる。

全身、梵字の呪文の刺青を彫られた女が首を絞めてきて

「いやああああああああああ」

かおりは目が覚めた。

全身びっしょりと汗を掻いている。

夢の中で蹴られたお腹がなぜか痛い気がした。

喉も物凄く渴いていたので、かおりはふらふらとした足取りでダイニングに向かった。

「つー？」

ダイニングの電気を点けるとなにかが玄関の方で光った。かおりが恐る恐る目を向けると、

「なつなんでつ」

玄関のコンクリートの床に青い光が灯っていた。

青いよどみ　　さやかを殺し、次々と命を喰らったあの呪われたブル　ダイアモンドが落ちている。

「うそつ

ぴちや

自分の真下で水の垂れる音がした。ゆっくりと下を見ると、自分の股の間から真っ赤な血が滴り落ちていた。生理はまだ先のはずなのに。

ガタガタ

誰もいなはずの奥の部屋で物音が聞こえてきた。
かおりは恐怖で動けない。
なにが起こっているのか、なにをすればいいのか、まともに思考
が働かない。

キイ

玄関がゆっくりと開かれる。

「……………」

淀川葵 全身に呪文の刺青が彫られた女が姿を現わした。
かおりは腰を抜かす。そして這いつぶばつて玄関から遠ざかるつ
とする。

バン

奥の部屋の窓が思いつきり開かれた音がした。

「……………」
ゆっくりと顔を上げると、淀川葵が窓から這い上がってきた。
「いやついやついやつ」「いやついやついやつ」
かおりはじたばたする。
淀川葵が迫りくる。

「きやつ」

かおりは淀川葵に首根っ子を捕まれ引きずられた。

「やめやめやめえ」

壊れた蓄音機のように懇願をするかおり。気が付いたら彼女は、窓から半身を宙に出していた。

引き摺り落とされる。

「かおりっ！－！」

玄関の扉が開かれた。

牧村は科搜研からダイアを盗み、新聞受けからかおりの家の玄関に放りこんだのだ。

理由は圭介をポスト修一に仕立てるためである。

新しいおもちゃ、自身の快樂のために圭介の一生を食い物にする。その第一歩としてかおりは格好の犠牲だと判断したからだ。

そのことに直感で察した佐渡は、

「かおりっ！－！」

かおりの家の玄関に飛び込んだ。

そして見る。かおりが見えないなにかに押されるように窓から半身を出しているところを。

「待つてろ」

佐渡はかおりに駆け寄り、彼女の腕をつかんでひっぱりうつとする。しかし、尋常ではない力がかおりを押しており、中に引き込むことができない。

「くつくそ」

このままではかおり共々自分も落ちる。

佐渡の脳裏に絶望が過ったとき、

「かおりっ！－！」

圭介が部屋に飛び込んできた。

圭介はかおりを引き上げるのに加担しようとしたが、途中で思い止まってダイニングに引き返す。

「これが

」

圭介は玄関に落ちていたブル ダイアモンドを拾い上げる。
そして、台所のコンロの火をつけ、

「こんなものがあるからっ！！」

青いダイアを火の中に投げ込んだ。

ブル ダイアモンドが 青いよどみが炎に包まる。

「うわっ」

かおりを外に押し出していた力が消え、佐渡はかおりを部屋の中へ引き入れると同時に引っ繰り返った。

「あはあはあ」

かおりはそれまで窒息していたかのように激しく息をする。

「大丈夫か、かおりっ！？」

圭介はかおりを抱き締めた。

「坊主、お前はいったい？」

どうしてここに？と訊いた言葉を含めて佐渡が訊ねる。

「おっさんがすごい、形相でかおりの家に走つていいくのが部屋から見えて、かおりがあんたに襲われやしないかと思つて」

「あっそ」

佐渡は圭介の答えに苦笑いを浮かべた。

「圭ちゃん……」

かおりはか細い声で呟く。

「燃えてる」

「えっ？」

「淀川さんが燃えてるよお」

圭介と佐渡には見えていない。しかし、かおりの田にはまつきりと見える。

あのブル ダイアモンドと同じよう、真っ赤な炎に焼かれる淀川葵の姿が。

「苦しそう」

図らずも夢の中で淀川葵が体験したことの一端を共有した今、彼

女の苦しみや無念がかおりには痛いほどわかる。

かおりは葵への同情で圭介の肩を涙で濡らす。

「これでよかつたんだ。彼女だってこれ以上関係ない人間を呪うのは本望じやないはずだから」

圭介はかおりの頭を撫でながら慰める。

そう、本当に恐ろしいのは淀川葵でも、彼女が用意した呪いでもない。彼女を呪いに駆り立てるまでいじめぬいた人の心、そしてこんな哀しい呪いまで利用しようとする人の心が生み出す歪みこそ、もつとも醜く恐ろしいのだ。

「そうだね」

かおりは頷く。

自分が見送れる

淀川葵が燃え尽きて、消えていく様を。

ブル・ダイアモンド　　彼女が遺した、彼女が命をかけて生み出した呪いと共に。

かくて、一つの事件は終わった。

牧村宗也は翌日、窃盗罪と捜査妨害の容疑で逮捕される。

そして数カ月後、赤井修一は自責の念にかられ自宅で首を吊つて自殺する。

牧村の思惑そのままに。

青

青い青い魂いのちがよどむ
赤い命ときを喰らう

どうして気付けなかつたんだろう
あの人気が変わつていくことに
とてもとても大切な人だつたのに
どうして見つめなかつたんだろう
あの人が去つてしまつ前に
とてもとても大好きな人だつたのに

月が落ちてゆく
暗い海の底に
風が連れてゆく
あの人の残り香を

青い青いいのち魂いのちがよどむ
赤い命ときを喰らう刻とき
哀しみとか
苦しみとか
永遠の孤独ラビコンズがさまよつ
抜け出せぬ宝石

みゆ貴茂

Hピロ グ

とある町の駅前、

「これ超可愛いない？」

「マジ、可愛いんですけど」

女の子たちが露天に並ぶアクセサリ に目を輝かす。

女の子が手にした指輪には、人を酷く魅了する青い宝石がついていた。

青いよどみ あと一〇……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8418d/>

ブルーダイヤモンド～青いよどみにひかれて～

2010年10月9日07時49分発行